

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320064

研究課題名(和文) 生表象の動態構造 自伝、オートフィクション、ライフ・ヒストリー

研究課題名(英文) The dynamic structure of life-representation : autobiography, autofiction, life history

研究代表者

森本 淳生 (MORIMOTO, Atsuo)

一橋大学・大学院言語社会研究科・准教授

研究者番号：90283671

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円、(間接経費) 3,990,000円

研究成果の概要(和文)：近代におけるメディアと教育の発展を通して全般化した生表象について、文学・思想・芸術のさまざまなジャンル、日記と作文の教育、種々の学問制度の具体的な考察を通して、分野横断的な分析を加えた。その結果、近代における生表象の諸形態は、さまざまな記録媒体の発展を通してアナーキーなまでに増殖した断片的な生の痕跡と、それらを理解し規制し統御しようとする諸制度とが交錯する場から生まれること、そしてそこには、フィクション、学知、アイデンティティ等の複雑な力学が作用していることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：By considering in the concrete various genres of literature, thought and the arts, the education of journal and composition, and diverse disciplines, we analyzed the life-representation which has been generalized in the modern age through the development of media and education. Our transdisciplinary analyses show firstly that the modern forms of self-representation result from the interactions between the fragmentary traces of life which proliferate anarchically through the development of recording media and the various institutions which try to understand, regulate and control them; and secondly, a complex dynamics of fiction, disciplines and identity is at work in this space of interactions.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：自伝 モダニティ メディア 表象 エクリチュール フィクション 国際研究者交流

1. 研究開始当初の背景

人間が生まれてから死ぬまでの一生のあいだに出会うさまざまな出来事、またそのさいに感じられるいろいろな感覚や印象、思惟ひとことと言うならば「生」の総体を「表象」すること。つまり、思い浮かべる、思い出す、文字にして記す、写真・映像として残す。は、18世紀の後半以降とりわけ西欧においてははっきりと姿を現し始める「近代」と、いったいどのような関係にあるのか。言いかえるなら、おそらく人間が人間としての自覚をもちはじめた原始の時代以来、さまざまな自己表現の試み、たとえばラスコーの動物群の壁画に始まり、アウグスティヌスの『告白』、モンテーニュの『エッセー』、貴族の回想録などを経て、ジャン＝ジャック・ルソーの『告白』に至る一連の「生表象」(フランス語で記せば *représentation de la vie*) を考えたとき、近代はそこにいかなる変化をもたらしたと考えることができるのか。そして、この生表象と近代の関係はたんなる歴史上の偶然にすぎないのか、それともそこには本質的な連関性があるのか。本研究の出発点となる関心は、このような「生表象の近代的構造の探究」であった。

もちろんこうした「生表象」の問題については、自伝、フィクション(文学)、ライフ・ヒストリーなどさまざまな領域において多くの研究が蓄積されてきたが、それらは相互に独立して行われてきたきらいがある。「生表象」というあえて一般的な視点を設定するとき、これらはむしろ近代におけるある共通した変化が、私語り・文学・学知のそれぞれの領域で現れたものとして捉えることができるのではないかと、というのが研究開始当初の仮説であった。また、そうした仮説を設定することで、異なる分野を専門とする研究者がともに省察する場を設定してみたいという思いもあった。

2. 研究の目的

以上のような関心にもとづいて、本研究は、近代において組織的に展開されたと考えられる、人間の「生」を「表象」する方法を、自伝のみならず、フィクション(文学的テキスト)や、精神分析、民俗学などの学知の生成・展開をも視野に入れて総合的に把握することを目的として開始された。そして、こうした「生表象の空間」の動態構造を明らかにすることにより、「生」と(広い意味での)「エクリチュール」との関連に関して、近代がいかなる変化をもたらしたのかを幅広い視野の中で明らかにすることを目指した。すなわち、18世紀以降、めざましい発展を見せた活字印刷とメディアの隆盛、そして教育の進展による識字率の向上や「生」の諸相へと目を向ける学知の発展のなか、「誰もが文字を書く／読む」時代となっていた近代において、人間の「生」はいかなる変貌をエクリチュールから被ることになったのが本研究の中

心的な問いである。さらに言えば、ブログやSNSで誰もが自己の生活(「生」)の断片を公表している現在、「書くこと／読むこと」は生活と不可分な要素として遍在化している。近代の淵源から分野横断的に「生表象」の問題を考えることを通して、こうした現代世界のありようを歴史的により立体的に理解することも、本研究を支える問題関心である。

3. 研究の方法

次にあげる三点を研究の柱として各研究分担者が研究を行うとともに、「5」の「学会発表」欄に記載したシンポジウム・研究会を行って、成果の報告・共有・発信に努めた。

第一は、ルジュンヌ、ギュスドルフ、フュマロリ、ルカルムなどが行ってきた自伝や回想録と文学についての研究を踏まえつつ、近代以降このジャンルが辿った展開の歴史を、それ以前のありようも視野に入れつつ、再考することである。18世紀後半のルソーやレチフから、19世紀以降の文学、そして20世紀後半に顕在化するオートフィクションや写真・映像と生表象の関係まで、生表象とフィクションが交錯する諸事例に再検討を加えることを試みた。

第二は、「生」を「表象」によって媒介する近代の諸装置について、メディアや教育制度、学知のあり方をふまえつつ、具体的に分析を加えることである。

第三は、フランスを中心に据えつつも、可能な限り日本(さらには中国、ドイツ)の事例を組みこみ、ともすれば西欧中心になりがちな視点の相対化に務めることである。

4. 研究成果

近代は膨大な記録をシステムティックに集積するようになった時代である。強力な中央集権国家のもと戸籍や行政文書、統計資料が作成・保存され統治に利用されるようになるのと軌を一にして、社会学、教育学、民俗学から精神分析にいたる近代の学知は、人間の「生」をさまざまに観察・記録し、体系的省察の対象としてきた。他方で、18世紀以降、出版文化／ジャーナリズムの急速な発展と教育の普及による識字率の向上とが社会に

書かれたものを氾濫させるなか、近代の人間はエクリチュールの優位のもとで「生」を語ることを強いられた。自己の、あるいは他者の「生」を表象することは人類の誕生とともに始まった営為ではあるが、近代には、メディア、文学・思想・芸術のさまざまなジャンル、学校教育(とりわけ作文・日記教育)に由来する素養、種々の学知など、「生」と「表象」を媒介する固有の諸制度がある。

「生」は即自的に存在しているのではなく、こうした制度によって媒介され、表象されることではじめて我々に対して現れてくる。このような「生」を表象する近代の諸々のシステムとそれが「生表象」の内実と与える影響について、(フランスと日本とを主なる領域

としつつも) 地域、ジャンル、学問分野を可能なかぎり横断しながら再考することが本研究の目的であった。「自伝」や「オートフィクション」といった用語を避け、「生表象」という一般性を持つ新語を用いるのも、こうした横断性を可能にするためである。

生表象システムの媒介性を強調することによって見えてくるものは、自己への関係と他者/社会への関係の相関性、表象プロセスに不可避免的に含まれるフィクション性、そして生表象がつねにはらむ自己証明の必要性である。我々は例えばレチフ・ド・ラ・ブルトンヌ(1734-1806)を考察することで、これらの問題を具体的に理解することができる。農民出身で印刷職人を経て作家となったレチフは、貴族が回想録で誇示するような華々しい家系を持たないため、自分の父親を称揚したり虚構の系譜を提示したりすることによって、自己の書く主体としての価値を証明しようとしたが、この価値を前提しえない自己証明は決して完結することができないから、フィクションをはらみつつ膨張せざるをえなかった。他方で、活字印刷することを前提にして自伝的作品を書いた最初期の作家でもあるレチフは、「自己の語り」を教団やサロンから切り離して匿名の public(公衆・読者)に向けなおし、「自己」をいわばメディア化した。しかし、こうして主体が出版メディアに接続された瞬間、自己表象は他者表象と同じ力学のもとに置かれることになる。自伝的作品『ムッシュー・ニコラ』とルポルターージュ的な物語『パリの夜』とを地続きのテキストとして書いたレチフにおいて、自己の語りが名もなき他者の語りと、自己暴露が窺視による他者の秘密の暴露と、たえず隣り合わせに置かれるのはこのためであると思われる。

2014年2月1日および2日に、一橋大学において行われた本研究の総括シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知」においては、研究代表者である森本が「序 生表象とは何か?」と題して、上記の視点を確認したうえで、回想録と自伝をめぐる研究史を「宗教的自伝と世俗化(脱宗教化)」、「貴族の回想録と平民化」、「芸術家/学者の自伝と自律化」の三点に整理して振り返り、18世紀以降の生表象はこの3つのプロセスが交錯する地点において成立することを指摘した。そして、その先に見えてくる「生表象」の問題系について、上記のレチフを具体的なケースとして分析しながら、それを「生表象の全般化とメディア化」、「生表象と学知」、「生表象とフィクション」の三点に整理した。この問題設定を受け、総括シンポジウムでは下記のような一連の報告が行われた。

I. 近代における 語る私 の生成(1)

西洋

- ・堀尾耕一「戯れ言をまじめに読む エラ

スムス『愚神礼讃』と古代模擬弁論の伝統」

- ・桑瀬章二郎「自伝誕生をめぐる神話 ルソーの『告白』受容の一側面」
- ・辻川慶子「レチフ、ネルヴァルと過去の現前 伝記、演劇、刻印をめくって」

II. 近代における 語る私 の生成(2)

日本

- ・田中康二「近世期日本における自叙伝の位相 本居宣長と上田秋成を例として」
- ・廣瀬千紗子「歌舞伎役者五代目市川団十郎の近世的自意識」

III. リアリズムとその彼岸

- ・片岡大右「鏡とアイロニー スタンダールにおける生表象」
- ・大浦康介「『わが秘密の生涯』My Secret Life を読む」
- ・エステル・フィゴン「『追憶の計画』 谷崎潤一郎とジョルジュ・ペレックの 自己構築における記憶とフィクション」

IV. 生表象 と教育制度 日記、作文、手記

- ・安田敏朗「書かされる「私」 作文・日記、そして自伝」
- ・中野知律「『花咲く乙女たち』の作文教育」
- ・久保昭博「『証言の時代』の幕開け 第一次世界大戦戦争文学をめくって」

V. 生表象 と近代的学知の生成

- ・立木康介「オートフィクションとしての理論 フロイトのケース」
- ・菊地暁「ライフヒストリー・レポートの無謀と野望 柳田民俗学を「追体験」する」

VI. 生表象 の主体と帰属性

- ・吉澤英樹「『戦争詩』から「自伝/オートフィクション」へ 「生表象」の帰属と文学性の問題について」
- ・尾崎文太「植民地と生表象、彼らが 私 を語る時、同時に 我々 を語り得るのか エメ・セゼールとフランツ・ファノンの場合」

- ・飯田祐子「女 の自己表象」
- ・坂井洋史「『文学』の拒絶、あるいは不可視のテキスト」

VII. 生表象 と視覚イメージ

- ・塚本昌則「オートフィクションと写真 本物 とは異なる価値観の形成に向けて」
- ・千葉文夫「北京の日曜日 クリス・マルケルからミシェル・レリスに」

本シンポジウムに、本研究で招聘したウィリアム・マルクスの報告(「文人 の集合的伝記を書くとはいかなることか?」, 2011年10月15日)、ジル・フィリップの報告(「ジャン=ポール・サルトル 生とフィクション」, 2012年7月21日)、ジャン=ニコラ・イルーズの報告(「『ロマン主義の百足』 ジェラルド・ド・ネルヴァルの『オーレリア』」, 2013年1月12日)、および尾方の報告(「学会発表」)を加えた論文集を成果報告書として公刊する準備を進めているが、「研究の方法」で挙げた三点に基づいて構成された成

果の概要は次の通りである。

第一に 生表象 の歴史的展開については、ルネサンス期等近代以前のあり方を考慮に入れつつ、メディアが大きく発展した 18 世紀後半から 19 世紀前半にいたる時期をルソー、レチフ、ネルヴァルを主要な事例として具体的に分析した。従来、近代の自伝表現は確固たる自己を誠実に表現し、読者もそれを共感的に読むことで成立すると考えられてきたが(「自伝契約」)、ルソーの『告白』の受容研究から見えてきたことは、むしろ表出された自己を捉えあぐねる同時代の人々の姿である。近代の 生表象 は容易に表出・伝達できぬものと関わっているのである。また、レチフの事例から見えてきたことは、こうした輪郭の定かではない自己の表現において、フィクションが大きく用いられていることである。ここでは 生表象 は虚構だからといって自己とまったく無関係な営為なのではない。フィクションを用いて自己の「真実」をより適確に表出することが問題になっているのである。さらには従来ほとんど指摘されてこなかったネルヴァルにおけるレチフへの参照を経て、トーマス・マン、サルトル、ペレック等 20 世紀の大作家たちや「オートフィクション」にいたるまで、フィクションは自伝と深く交錯しながら 生表象 を支えてきた。18 世紀後半以来現代にいたる近代の 生表象 の歴史が、不定形な 生をフィクションをも用いながら表出しようとする一連の試みであったことを総体的に明らかにできたことが本研究の第一の成果である。

第二に 生 を表象によって媒介する近代の諸装置については、まず教育の進展に伴い識字率が向上するなか、作文・日記・手記の執筆が全般化していく過程を確認する一方で、それが、ブルーストの『失われた時を求めて』や第一次世界大戦戦争文学等、文学のあり方とも密接に関わることを明らかにすることができた。また精神分析と民俗学を具体的ケースとして、生表象と学知の関係について考察し、とくに柳田民俗学を、日本各地のインフォーマントから 生 の情報を収集し、それを民俗学として体系化していくひとつの 生表象システム であると明らかにできたことは大きな収穫であった。さらに、こうした文学、教育、学知の進展のなかで全般化した 生表象 のさまざまな主体について、植民地出身作家や女性作家等を事例として具体的に分析し、そこに共同体への帰属と離脱をめぐる複雑な力学が作用していることを明らかにすることができた。

第三に、従来西欧中心主義的に考えられてきた自己表出の問題を、生表象システム という一般的な視角から日本や中国の事例をも加えて再考することで、相対化することができた。他方で、本研究において7人のフランス人を招聘する機会を得て、日仏の研究者が意見を交換する場を持つことができた

ことは、国際研究者交流という観点からのみならず、生表象 研究の視点の多様化という点からも有意義であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

森本淳生、主体、欠如、反復 レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『ムッシュー・ニコラ』と虚構的自伝、人文・自然研究、査読なし、第7号、2013年、p.87-143

尾方一郎、Thomas Mann als Sammler. Der Zauberberg und Modernität, Hitotsubashi journal of arts and sciences, 査読なし、第53号、2012年、p.1-8.

森千香子、L'archipel invisible. L'écriture dans les « cultures de banlieue », Hommes et migrations, 査読あり、第1297号、2012年、p.68-79

立木康介、狂気的愛、狂女への愛、狂気のなかの愛 ブルトン、デュラス、ラカン、思想、査読なし、2012年第10号(10月)、2012年、p.154-197

立木康介、露出せよ、と現代文明は言う エピローグ、文藝、査読なし、2012年夏号(4月)、2012年、p.228-244

森本淳生、存在と意識 自伝としての批評、ヴァレリー集成 III 詩学の探究(図書所収論文)、査読なし、筑摩書房、2011年、p.533-547

千葉文夫、ミシェル・レリスの肖像 アルベルト・ジャコメッティの場合、早稲田大学大学院文学研究科紀要、査読なし、第57巻、2011年、p.17-34

中野知律、『シクスティヌ』、あるいは世紀末小説の鏡、言語社会、査読なし、第5号、2011年、p.170-191.

森本淳生、批評言語と私-小説-論 ヴァレリーから小林秀雄へ、言語社会、査読なし、第5号、2011年、p.150-169

[学会発表](計30件)

安田敏朗、書かされる「私」 作文・日記、そして自伝、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知」, 2014年2月2日、一橋大学(東京都)

中野知律、「花咲く乙女たち」の作文教育、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知」, 2014年2月2日、一橋大学(東京都)

久保昭博、証言は文学になにを残したか? 第一次世界大戦戦争文学をめぐって、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知」, 2014年2月2日、一橋大学(東京都)

立木康介、オートフィクションとしての理論 フロイトのケース、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクシ

ン・学知 』、2014年2月2日、一橋大学(東京都)

菊地暁、ライフヒストリー・レポートの無謀と野望 柳田民俗学を「追体験」する、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知 』、2014年2月2日、一橋大学(東京都)

飯田祐子、女の自己表象、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知 』、2014年2月2日、一橋大学(東京都)

坂井洋史、「文学」の拒絶、あるいは不可視のテキスト、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知 』、2014年2月2日、一橋大学(東京都)

塚本昌則、オートフィクションと写真 ジョナサン・リテル『慈しみの女神たち』を出発点に、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知 』、2014年2月2日、一橋大学(東京都)

千葉文夫、北京の日曜日 クリス・マルケルからミシェル・レリスに、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知 』、2014年2月2日、一橋大学(東京都)

森本淳生、生表象とは何か?、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知 』、2014年2月1日、一橋大学(東京都)

桑瀬章二郎、自伝誕生をめぐる神話 ルソーの『告白』受容の一側面、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知 』、2014年2月1日、一橋大学(東京都)

辻川慶子、レチフ、ネルヴァルと過去の現前 伝記、演劇、刻印をめぐる、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知 』、2014年2月1日、一橋大学(東京都)

田中康二、近世期日本における自叙伝の位相 本居宣長と上田秋成を例として、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知 』、2014年2月1日、一橋大学(東京都)

廣瀬千紗子、歌舞伎役者五代目市川團十郎の「語る私」、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知 』、2014年2月1日、一橋大学(東京都)

片岡大右、鏡とアイロニー スタンダールにおける生表象、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知 』、2014年2月1日、一橋大学(東京都)

大浦康介、『わが秘密の生涯』(My Secret Life)を読む、シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知 』、2014年2月1日、一橋大学(東京都)

尾方一郎、トーマス・マンと自伝、「生表象の動態構造」研究会、2013年10月12日、一橋大学(東京都)

久保昭博、証言は文学になにを残したか?

第一次世界大戦戦争文学をめぐる、シンポジウム「経験、エクリチュール、学知 生表象の動的プロセス 』、2012年11月24日、一橋大学(東京都)

森千香子、郊外で「書く」 在仏移民による「自己の語り」をめぐる一考察、シンポジウム「経験、エクリチュール、学知 生表象の動的プロセス 』、2012年11月24日、一橋大学(東京都)

菊地暁、ライフヒストリー・レポートの無謀と野望 柳田民俗学を「追体験」する、シンポジウム「経験、エクリチュール、学知 生表象の動的プロセス 』、2012年11月24日、一橋大学(東京都)

⑲片岡大右、ポール・ベニシューの生涯と業績、ワークショップ「文学的なもの」の身分規定をめぐる ベニシュー『作家の聖別』翻訳出版を機に、2012年10月21日、日本フランス語フランス文学会秋季大会、神戸大学(兵庫県)

⑳飯田祐子、書くことと告白、シンポジウム「私小説・亀裂・モダニティ 日本/中国の視角からの再考 』、2012年1月12日、一橋大学(東京都)

㉑坂井洋史、窃視の主体、都市遊歩、そして「日記」、シンポジウム「私小説・亀裂・モダニティ 日本/中国の視角からの再考 』、2012年1月12日、一橋大学(東京都)

㉒辻川慶子、ネルヴァル「ニコラの告白」における剽窃と自伝、シンポジウム「自伝的エクリチュールにおける他者と集合性」、2011年10月15日、一橋大学(東京都)

㉓尾崎文太、エメ・セゼール 『帰郷ノート』における人称の問題、シンポジウム「20世紀フランス語圏文学における《自伝的エクリチュール》の探求」、2011年1月29日、一橋大学(東京都)

㉔久保昭博、レーモン・クノーの自伝的エクリチュール、シンポジウム「20世紀フランス語圏文学における《自伝的エクリチュール》の探求」、2011年1月29日、一橋大学(東京都)

㉕千葉文夫、ミシェル・レリス、あるいは自伝のパラドックス、シンポジウム「20世紀フランス語圏文学における《自伝的エクリチュール》の探求」、2011年1月29日、一橋大学(東京都)

㉖廣瀬千紗子、初代市川團十郎の「願文」をめぐる、シンポジウム「日本における《私語り》の変容 近世から近代へ」、2010年9月23日、一橋大学(東京都)

㉗田中康二、自叙伝・自画像・自讃歌 本居宣長の場合、シンポジウム「日本における《私語り》の変容 近世から近代へ」、2010年9月23日、一橋大学(東京都)

㉘安田敏朗、「生表象」参与の前提 作文・日記・書簡、シンポジウム「日本における《私語り》の変容 近世から近代へ」、2010年9月23日、一橋大学(東京都)

〔図書〕(計4件)

坂井洋史、逸脱と啓示 中国現代作家研究、汲古書院、2012年、460 p.

片岡大右、隠遁者、野生人、蛮人 反文明的形象の系譜と近代、知泉書館、2012年、434 p.

久保昭博、表象の傷 第一次世界大戦からみるフランス文学史、人文書院、2011年、162 p.

安田敏朗、かれらの日本語：台湾「残留」日本語論、人文書院、2011年、291 p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森本 淳生 (MORIMOTO Atsuo)
一橋大学・大学院言語社会研究科・准教授
研究者番号：90283671

(2) 研究分担者

千葉 文夫 (CHIBA Humio)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：00163741

桑瀬 章二郎 (KUWASE Shojiro)
立教大学・文学部・教授
研究者番号：10340465

森 千香子 (MORI Chikako)
一橋大学・大学院法学研究科・准教授
研究者番号：10410755
(平成24年度より研究分担者)

片岡 大右 (KATAOKA Daisuke)
東京大学・大学院人文社会系研究科・研究員
研究者番号：30600225

廣瀬 千紗子 (HIROSE Chisako)
同志社女子大学・表象文化学部・教授
研究者番号：50167615

中野 知律 (NAKANO Chizu)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：50237343

大浦 康介 (OURA Yasusuke)
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：60185197

久保 昭博 (KUBO Akihiro)
関西学院大学・文学部・准教授
研究者番号：60432324

立木 康介 (TSUIKI Kousuke)
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：70314250

坂井 洋史 (SAKAI Hirobumi)
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：80196047

尾方 一郎 (OGATA Ichiro)
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：80242080

飯田 祐子 (IIDA Yuko)
神戸女学院大学・文学部・教授
研究者番号：80278803

安田 敏朗 (YASUDA Toshiaki)
一橋大学・大学院言語社会研究科・准教授
研究者番号：80283670

菊地 暁 (KIKUCHI Akira)
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：80314277

辻川 慶子 (TSUJIKAWA Keiko)
白百合女子大学・文学部・准教授
研究者番号：80538348

田中康二 (TANAKA Koji)
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：90269647